

# 重度障害者用意思伝達装置を導入した脊髄小脳変性症の事例報告

Key words: 脊髄小脳変性症, コミュニケーション機器, 環境整備  
児玉努<sup>1)</sup>, 廣田洋一<sup>1)</sup> <sup>1)</sup>コールメディカルクリニック広島

**【はじめに】**重度脊髄小脳変性症(以下 SCD)事例に, 重度障害者用意思伝達装置 OriHime-eye+Switch(以下 OriHime)導入を支援した. 重度障害者用意思伝達装置(以下意思伝達装置)の導入割合は ALS に対して 67%, SCD には 13% という報告がある<sup>1)</sup>が, SCD に関する意思伝達装置の報告は少ない. 今回, 症状に合わせた OriHime の設定により使用可能となり, 導入に至ったため, 支援経過を振り返り報告する.

**【事例紹介】**60 代女性, 夫, 長女と 3 人暮らし. X 年に平衡機能障害, X+1 年に脊髄小脳変性症と診断. X+3 年に人工呼吸器, 気管切開術, 胃瘻造設施行. 同年に摂食嚥下目的に訪問 ST 開始, X+4 年ベッド上で行える創作活動導入目的に訪問 OT 開始.

**【作業療法評価】**ADL 全介助で終日ベッド上生活, 筋力は上肢 2/2, 下肢 2/2, 体幹 2, 眼球運動は追視可能だが, 上方と左方は眼振あり注視困難. 疲労とともに眼球運動速度低下. 手指振戦による誤操作あるが, 呼び出しに左母指でスイッチ使用. コミュニケーションは手指による合図や透明文字盤を使用しているが, 自発的に想いを伝える手段はない.

**【作業療法計画】**本人の希望は「もっと思っていることを伝えたい」共有目標としては 4 ヶ月後に意思伝達装置を用いて視線とスイッチを

使用し意思伝達できるとし, 作業療法プログラムは本人に適した意思伝達装置とスイッチの選定とした.

**【経過】**①導入検討期(介入開始~2 か月目): レッツチャットを試すも文字選択速度にスイッチが間に合わず非実用的, 人工喉頭は母音以外の発音困難. OriHime は操作速度や文字盤サイズ調整, スイッチ併用可能であり導入を検討. 注視困難と眼球運動の速度低下に対して, 文字を大きくし, 画面の移動速度を遅くした. 眼球の運動方向の困難さに対しては注視範囲を広くし, 中心位置を右下に設定.

スイッチはスペックスイッチが押しやすく, 振戦に対する影響が少ないため, 選定した.

②申請~導入(3 か月~9 か月): 調査判定は文字入力操作場面の動画と理由書を送付し, 4 か月目に支給決定. 9 か月目に納品.

**【結果】**OriHime で文字入力し, 娘がメールで送ることで友人とのコミュニケーションを再開出来た. 課題として 20 分以上使用すると眼疲労により継続使用が困難となる. 使用頻度は 2 回/週, 本人からは「上手に使えるようになりたい」, 長女は「時間はかかるが言いたいことが伝えられている。」と意見が聞かれた.

**【考察】**今回, 振戦や眼球運動異常に合わせた OriHime の設定変更により文字入力可能となり, 家族以外の人とコミュニケーションが可能になったことは, 本人の QOL 向上に寄与したと考える.

導入までには 9 か月を要した. 井村<sup>1)</sup>は支給判定前の試用と評価を経て早期支給が必要と述べている. 今後は適切な期間で支給を支援するためにマニュアル作成を検討している.

**【文献】**1) 井村保: 重度障害者意思伝達装置に対する補装具日支給実績の詳細分析. 平成 26 年度総括・分担研究報告書, 2014, pp. 13-20.